

序

炎症性腸疾患（Inflammatory Bowel Disease: IBD）、潰瘍性大腸炎（Ulcerative colitis: UC）とクローン病（Crohn's disease: CD）、は一端寛解に至っても大部分の患者がその後も再燃と寛解を繰り返しながら慢性に経過する難治性炎症性腸疾患である。未だ病因・病態不明のため完治に至る根治療法はなく、長期に渡る通院加療あるいは頻回の入院加療を強いられ就学・就業あるいは結婚・出産といった日常生活に支障をきたし、QOLが大きく損なわれる患者が少なくないことから指定難病と共に特定医療費助成対象疾患の一つに認定されている。

IBD はそのような難治性疾患にも関わらず本邦における患者数の増大は著しく、UC 約 16 万人、クローン病約 4 万人と IBD 患者 20 万人の時代に達し、世界でも有数の IBD 罹患国と言っても過言でない状況になっている。従って、適正な診断基準と治療戦略を確立し QOL を高めた診療体制を構築することは、国民医療福祉の向上にとって極めて重要かつ急務の課題となっている。

「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」班は過去 40 年にわたり、本邦における IBD の実態を明らかにし発症要因の解明に向けた疫学研究、時代に即した診断基準や治療指針の作成・改訂、新規治療法の確立と適正運用を目指す多施設共同臨床研究の推進、病因・病態の解明を目指す基礎研究など広範囲な研究実績によって厚生労働省難治性疾患対策事業において多大なる貢献を果たしてきた。

平成 26 年度から厚生労働省難病対策研究事業が変革され、難病治療開発に繋がる基礎研究を推進する「実用化研究事業」と、難病疫学研究や診断・治療指針作成そして広報活動を担う「政策研究事業」に二分化された。「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」班も、基礎研究分野は「実用化研究事業」の一環として新たな研究体制が東京医科歯科大学消化器内科教授渡辺守先生を研究代表責任者として再スタートし、臨床分野は「政策研究事業」の一環として私が研究代表責任者として 3 年間引き継ぐ重責を担うことになった。

渡辺守・前班長のご尽力によって、「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」は世界的業績を輩出する研究班に育て上げられた。その偉大なる研究班を引き継ぎ一層の発展をめざす責務を完遂するため、本年度より 3 年間継続する新たな研究体制を組織した。本研究班では新たに大きく 5 つの骨子を掲げ、研究分担者の先生を中止にそれぞれの骨子に沿った具体的プロジェクト案を立案して頂き一部は既にスタートを切った。2 回の総会を開催活発に終了し、前班から引き継いだものを含めた全てのプロジェクト完遂に向け初年度が終了したので業績集として発刊することができた。各プロジェクト計画立案と実行に多大なるご尽力をいただいている分担研究者および協力研究員の諸先生方に深く御礼申し上げますと共に、本研究班組織に際して多大なるご助言ご支援をいただいた前班長渡辺守先生および元班長北里大学研究所 IBD 研究所日比紀文先生にこの場をお借りして深謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

研究代表者 鈴木康夫